

S36a

## 「あかり」活動銀河核のダストトーラスの Spectral Energy Distribution の構築とダストトーラスのモデル化

大藪 進喜、山田 梨加、石原 大助、金田 英宏、永山 貴宏 (名古屋大学), 鳥羽 儀樹、松原 英雄 (ISAS/JAXA)

Spitzer 宇宙望遠鏡 IRS 分光器による中間赤外線分光観測において、活動銀河核の中心核周りに存在するダストトーラスに、標準的なトーラスモデルだけでは説明が困難で、グラファイト系の高温度のコンポーネントが必要であることが示唆されている。しかし、このようなコンポーネントは、静止波長系で  $3\text{-}5\mu\text{m}$  で強く見えてくるコンポーネントであり、 $5\mu\text{m}$  以上の長波長しか観測出来ない IRS では、赤方編移した天体でしか観測が難しかった。そこで「あかり」IRC による  $2.5\text{-}5\mu\text{m}$  をカバーする近赤外線分光が必要である。

我々は活動銀河核探査のために「あかり」中間赤外線全天サーベイで抽出した天体の「あかり」近赤外線分光観測を行った。その近赤外線分光データのある活動銀河核のうち、「あかり」全天サーベイの測光値とともに、SDSS、2MASS、WISE の測光値をもつ 13 活動銀河核を詳細な Spectral Energy Distributions (SEDs) を構築した。ここから SDSS の測光値を元に中心核もしくは母銀河の SED を差し引くことで、赤外線超過分の SED、すなわちダストトーラスだけの SED を構築を行った。これらの SED の短波長成分を説明するには、 $1500\text{K}$  前後の高温ダストが必要である。またこれらの SED を、高温グラファイトダストとクランピーダストトーラスモデルの 2 コンポーネントでの表現を試みた。これらのモデルと活動銀河核のタイプ毎の違いについても議論する。